

列王記下4章18-21、32-37節

コリントの信徒への手紙一9章16-23節

マルコによる福音書1章29-39節

2024年も2月に入りましたが、先週から急に寒さも増したように思えます。皆さまもどうぞ体調にはお気をつけください。改修工事も着々と進んでいます。聖堂壁の一部は真っ白に変わっています。

さて、先週の福音書は、イエス様がガリラヤの会堂で初めて奇跡を起こした場面でした。その結果は、「**こうして、イエスの評判は、たちまちガリラヤ地方の隅々にまで広まった**」(マルコ1:28)とまとめられている通り、会堂という公の場所の出来事であり、その内容は多くの人に伝わりました。

本日の箇所は「**一行は会堂を出るとすぐ、シモンとアンデレの家に行った。ヤコブとヨハネも一緒であった**」(マルコ1:29)とあります通り、時間的に連続したお話です。なぜ、すぐにシモン(ペトロ)とアンデレの家に向かったのかわかりませんが、「**シモンのしゅうとめが熱を出して寝ていたので、人々は早速、彼女のことをイエスに話した**」(マルコ1:30)とありますので、ペトロは、会堂での奇跡を目撃した後、しっかりと自分の家族の癒しを真っ先にお願ひしたかもしれません。そして、そこで起きたことは、熱で寝ていたシモンのしゅうとめを癒すことです。先の会堂での出来事と比較すると、きわめてプライベートな出来事です。

それでも、その出来事が契機となって、「**夕方になって日が沈むと、人々は病人や悪霊に取りつかれた者を皆、御もとに連れて来た。町中の人々が戸口に集まった**」(マルコ1:32-33)と続きます。イエス様は、再び大人数を対象として奇跡を行ったのです。それは「**イエスは、いろいろな病気にかかっている大勢の人たちを癒やし、多くの悪霊を追い出して、悪霊にものを言うことをお許しにならなかった。悪霊がイエスを知っていたからである**」(マルコ1:34)とまとめられています。「**悪霊がイエスを知っていた**」という説明は間接的に、周囲の人間はまだ、イエス様のことをはっきりと知らないと暗示しています。その点についてここではそれ以上触れません。

本日の聖書日課は、そのあとの物語も該当箇所です。そこには、「**朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた**」(マルコ1:35)とあります。たくさんの人と接し、たくさんの人を癒し、またたくさん悪霊を追放したがゆえに、一人、黙想の時を持つとするイエス様の姿です。なぜ、イエス様がそのような時を持つとしたのか、その経緯は書かれていません。それゆえに想像することが大切です。できる限りたくさんの人を対象とすべきか、一人ひとりにしっかりと時間をとるべきか、人々の求めに応じて、病気の癒しや悪霊追放をするだけでよいのか、いろいろと考えあるは悩むことがあったのでしょう。しかし、それゆえ、イエス様は「**祈っておられた**」のでした。つまり、何かを決断をするとき、また何か

を始めるにしても、何かを終えたとしても、祈りが大切であることを示されたのです。

しかし、弟子たちについての描写を見ると、「シモンとその仲間はイエスの後を追い、見つけると、『みんなが捜しています』と言った」（マルコ 1：36-37）とある通りです。ここに弟子たちに対する批判の言葉はありません。しかし、彼らの言葉が意味することは、直接的には、町の人々みんなが探していますということですが、間接的には、いろいろに受け取れます。町の人々みんなが奇跡をもっと求めて待っています、ともとれるのです。

いずれにしてもそのような中で、イエス様は、「近くのほかの町や村へ行こう。そこでも、私は宣教する。私はそのために出て来たのである」（マルコ 1：38）と再び歩み始める決断をされます。そして、再びまとめの言葉として、「そして、ガリラヤ中の会堂に行き、宣教し、悪霊を追い出された」（マルコ 1：39）と報告されるのです。

本日の福音書の物語の流れは、出来事の報告を超えて、祈ることの大切さを第一に示しています。イエス様は活動を開始され、様々な結果をもたらしました。たからこそ、祈られたのでした。教会の活動は祈りに始まり祈りに終わると言いますが、まさにその原型がこのイエス様の姿にあるといえるのです。

そして、その祈りは、「宣教」という言葉にも関わります。「宣教する」という言葉は、以前の口語訳では、「教を宣べ伝えよう」、さらに前の文語でも「教を宣ぶべし」となっていました。新共同訳から「宣教する」となり、新しい聖書協会共同訳でも、「宣教する」となりました。「宣教する」は日本語としてはあまり美しくありません（と翻訳の際に日本語の専門家の方にご指摘を受けました）。ただし、「宣教」という言葉に関する様々な現代的解釈と、「宣教する」という表現が一般的となったことから、聖書協会共同訳でも、新共同訳と同じとしました。それゆえ、あまり美しくない表現であるだけでなく、「宣教」という言葉の意味の広がりをもそのままにしてしまったところもあります。マルコの物語は、イエス様の宣教について「教を宣べ伝え（宣教）、悪霊を追い出された」と表現している通り、神の言葉の伝達と神の出来事の発生、その不可分である二つのうちの一つであることを示します。それが「権威ある新しい教え」（マルコ 1：27）であるからです。それをどう具体化するのか、それが常に教会の課題なのです。そして、教会にとって大切な事柄であるからこそ、個人で祈ることだけでなく、礼拝を通して共に祈ることを通して、道を定めることが大切なのです。様々な活動がすでにあり、出来ることも多いわたしたち教会であればなおさらです。

マルコという物語が示す、イエス様の十字架への道は、本日の箇所から言えば、まだまだ先のお話です。しかし、イエス様が歩まれた十字架への道は、祈りを通して生まれた道です。来週の2月14日から大斎節に入ります。今年も共に祈ることを大切にしながら、大斎節を過ごし、主のご復活を迎えたいと思います。